

アルボス大陸キャンペーン (通称ヒロシゲ卓) ・世界設定

目次

1	アルボス大陸概要	2
1.1	地勢・気候	2
1.2	魔境	2
2	入植の歴史	2
2.1	アモール王国	2
2.2	インガリア帝国	2
3	アモール=インガリア戦争	2
4	国家詳細：アモール王国	3
4.1	概要	3
4.2	政治	3
4.3	軍事	3
4.4	主要都市ほか	3
4.5	主要人物、組織	4
4.5.1	王族	4
4.5.2	政府高官	4
4.5.3	元老院	5
4.5.4	民会	5
4.5.5	その他	5
5	国家詳細：インガリア帝国	6
5.1	概要	6
5.2	国号と爵位について	6
5.3	歴史	7
5.3.1	メロヴェオ・エレーラの登場	7
5.3.2	アルボスへの入植	7
5.3.3	帝国建国とハルーシア戦争	7
5.3.4	『栄光の遠征』、そして死	7
5.3.5	女帝時代	7
5.3.6	三大州の成立	8
5.3.7	帝国大乱	8
5.3.8	現在	8
5.4	政治	8
5.5	軍事	8
5.6	地域詳細：メディテラシア (Mediterrasia)	10
5.6.1	主要都市ほか	10
5.6.2	主要人物、組織	10
5.7	地域詳細：オステラシア / テレスティア (Osterrasia / Terrestia)	13
5.7.1	主要都市ほか	13
5.7.2	主要人物、組織	13
5.8	地域詳細：ヴェステラシア (Westerrasia)	15

5.8.1	主要都市ほか	15
5.8.2	主要人物、組織	15

1 アルボス大陸概要

本キャンペーンの舞台となるのは、“アルボス大陸北方”と呼ばれる地域である。以下、本地域についての概要を記載する。

1.1 地勢・気候

アルボス大陸は、『グランクレスト』で主に舞台となっているアトラタン大陸の南方に位置する大陸である。広さは200万平方キロメートル程度と言われるが、その多くは魔境に覆われており人類が生活するには値しない。南西部には山脈、東部には湿原が広がり、北東部から中央部にかけては平原地帯となっている。

アトラタン大陸に比べるとおおむね温暖ではあるが、全体としては温帯に属する。また平原部は典型的な地中海性気候を示しており、降雨は冬季に集中している。年間降水量は1000ミリ程度。主要農作物はコムギ、オリーブ、ブドウなど。比較的乾燥しているため、山岳部を除くと家畜の放牧はあまり行われていない。

1.2 魔境

100年前にアルボス大陸の再入植がはじまって以来、不斷の努力をもって魔境の開拓は進められているが、残念ながら大陸の多くははまだ魔境のもとにある。例外的に混沌濃度が低いのが、インガリア帝国のメディテラシア地方であり、同地方だけはアトラタン大陸ととぼ変わらない環境にある。

2 入植の歴史

秩序回復戦争いらい、アルボス大陸に対する再入植の試みは多数存在した。しかしながらその殆どは失敗に終わっており、定住に成功したのは次の2例のみである。

2.1 アモール王国

300年ほど昔、ハルーシアが何回目になるかもわからないアルボス入植団を派遣した。指揮官の名を取って『ロムルス入植団』と呼ばれた彼らは、それまでと同様早々に本国との連絡を絶ったため、やはり失敗したと判断された。だが、彼らは幸運な（あるいは不運な）ことに壊滅していた訳ではなかった。

後方との連絡を遮断された入植団は不退転の覚悟をもって開拓を敢行、十数年の苦節の末大陸南方で国家を建設するに至る。

2.2 インガリア帝国

一般的に史上初の再入植成功例とされているのは、上記のアモール王国ではなく、インガリア帝国である。電撃的に南部ハルーシアを統一した英傑メロヴェオに率いられた大入植団は、その勢いそのままアルボス大陸に橋頭堡を築くことに成功したのである。

メロヴェオ自身は開拓の過程で命を失ったものの、帝国は大陸随一の大国として存続している。

3 アモール＝インガリア戦争

4 国家詳細：アモール王国

4.1 概要

300年ほど前、ハルーシアから渡った移民が建国した王国。アルボス大陸中部に位置しており、魔法師協会からは子爵領の認定を受けている。アルボスに築いた橋頭堡が壊滅したことからハルーシアでは壊滅したと判断されていたが、実際には南下を進め定住を成功させた。国土の西に連なる山地の影響で全体的に乾燥しており、特にスティペース川以西は沙漠となっている。東部にはステップが広がり、スティペース川を利用した灌漑で国土を潤している。

初代国王ロムルスが契約した『竜』が持つ強大な権能で国土を維持しているが、その代償のためか歴代の王には発狂者や自殺者が極めて多い。この権能については国民にも広く知れ渡っており、一部では王（とその配偶者）を消耗品だと考える向きすらある。

文化は300年前のハルーシアのものがベースにあるが、外部から切り離されて長かったために独自に形成されたものとなっている。

4.2 政治

かつては国王が強大な権力を握っていたが、150年ほど前に起きた宮廷クーデターにより実権の殆どを元老院に取り上げられた。国政レベルで国王が行うことは、祭祀のほかに非常時の軍事指揮に限られている。

国王に代わって立法を掌握しているのが元老院である。建前上は全国民に被選挙権があるものの、実質的には王族のほか、トゥエリ、アエクア、ファビア、コルネリアをはじめとする10氏族が議席の殆どを占める。かつては氏族ごとに党派を形成していたが、建国から300年が経過した今では血縁よりも主義主張が重要視される。

民会は、貴族主導の元老院に反発した市民の要求の結果、100年ほど前に誕生した新しい議会である。こちらは全国民が被選挙権を持つ組織であり、広く民衆の意見を反映させたものとなっている。しかしながら民会の決議に対しては元老院が拒否権を持っており、これが元で激しい対立に発展することもしばしばである。民会の指導者は護民官。政府閣僚の一を占める。

行政府のトップは執政官。執政官は6名存在し、うち4名は内務、外務、大蔵、土木の各行政を分掌する。1人は首都ロムリアの行政長官であり、いま1人は主席執政官として政府全体を監督する。

司法のトップは法務官である。こちらは5名おり、各地方の司法長官となる。主席法務官はロムリアの最高裁判所長である。また、法務官は主席法務官の招集に応じて立法府の監督にあたる。

元老院議長、主席執政官、主席法務官はそれぞれ同格であり、彼らの意見が対立したときは多数決で意思決定を行う。

4.3 軍事

すべての執政官、法務官には軍団指揮権（インペリウム）が与えられているが、これは名目的なものであり、軍の総指揮は主席執政官直下の軍務長官が担う。

軍務長官は近衛兵を除く全軍団への命令権を持ち、非常時には内務府配下の警察をも指揮下に収める。

近衛兵は国王直属の軍団である。平時は軍務長官へ指揮が委任されているが、有事の際には国王みずから指揮を取る。

4.4 主要都市ほか

ロムリア (Romulia)

スティペース川 (Stipes)

トゥベル湖 (Tuber lacus)

4.5 主要人物、組織

4.5.1 王族

オーレン・モルターリス・アモール (Oren Mortalis Amor)

年齢：46 性別：男性

アモール国王。26年前の対インガリア開戦以来、権能を持って常に最前線に立ち続けてきた。

若い頃は眉目秀麗な美男子として名を馳せたが、度重なる権能の使用による心労のため、その面影は完全に消えうせている。

ヴィクトール・ゼノ・アモール (Victor Xenos Amor)

年齢：14 性別：男性

アモール第一王子。武才こそ十人並みであるが、内治に優れた才を示しており、次代の王として将来を囑望されている。

最近では床に伏せることが多くなった父王にかわり、地方の巡察など公務の一部を代行している。

4.5.2 政府高官

マルクス・アモール・グラディアヌス (Marcus Amor Gradianus)

年齢：51 性別：男性

主席執政官 (他国の宰相に相当)。アモール王家の分家、グラディアヌス家の出身。

調整型の政治家としての声望は高いが、戦時たる現在では指導力に乏しいとも評されている。

グナエウス・トゥエリ・インペトゥス (Gnaeus Tueri Impetus)

年齢：40 性別：男性

軍務長官。王室の藩屏たるトゥエリ氏族宗家の家長である。軍人の多かったトゥエリ氏族は開戦以来夥しい数の人的被害を被っており、それに報いる形で現在の職を与えられた。

歩兵隊の先頭で指揮を取る勇猛な指揮官として知られており、本人もできるなら前線に復帰したいと考えている。

クイントゥス・アエクウス・トルティヌス (Quintus Aequus Trutinus)

年齢：53 性別：男性

主席法務官 (司法のトップ)。官僚を輩出してきたアエクウス氏族のなかでも、ユースティティア家と双璧をなすトルティヌス家の当主である。権能問題でユースティティア家を失脚させ、首座法務官の職を手に入れた。

対インガリア開戦当時、存在していなかった戦時法を立法した優れた法律家。聖印の権能については積極的に使うべきとの立場を堅持している。

4.5.3 元老院

プブリウス・ファビウス・クルトゥス (Publius Fabius Cultus)

年齢：25 性別：男性

元老院議長。名門ファビア氏族の御曹司であり、端正な容貌と整然とした弁論で市民の支持を得ている。

「王といえども国家の一部に過ぎない」を持論とし、聖印の権能を軸にすえた (すなわち、国王を使い捨てにするような) 国防政策を提案している。

ガイウス・コルネリウス・マルティヌス (Gaius Cornelius Martinus)

年齢：47 性別：男性

抗戦派領袖。トゥエリ氏族と並び、軍人を輩出してきたコルネリア氏族の出身である。

帝国に対する徹底抗戦を唱え、必要とあらば焦土戦術すら提案する過激な人物。

4.5.4 民会

マルクス・アエティウス (Marcus Aetius)

年齢：33 性別：男性

護民官。元老院に対し立場の弱い民会の権限強化を求めている。

4.5.5 その他

リカルド・エレラ / リカルドゥス・ヘッレルス (Ricardo Herrera / Ricardus Herrerus)

年齢：58 性別：男性

インガリア帝国の前ヴェステラシア総督。

初代皇帝の弟である初代総督エルナンから数えて4代目にあたるが、先達の見せた気概はなく、ただただ虚栄心と権勢欲のみが強い無能。クリストファー・ヴァルゼライドのクーデターによりヴェステラシアを追われ、一族郎党と共にアモールへと亡命した。

現在では持ち込んだ財貨も底を尽きつつあり、保身と金のために大姪にあたるレティシアを売り渡した。

5 国家詳細：インガリア帝国

5.1 概要

アルボス大陸北方に位置する大国。ハルーシアの植民が成功した稀有な例であり、約一世紀に渡って存続している。魔法師協会による公式な爵位を有している訳ではないが、その規模は侯爵領相当と考えられている。大陸北方の大部分を領有していると公称しているが、領土の多くは魔境に覆われており、実態としては街道と城塞都市に依拠した点と線の支配に過ぎない。とはいえ、ハルーシア、ひいては幻想詩連合からの支援による、圧倒的な物量を背景にした軍事力は国力を遥かに凌いでおり、その力は決して侮ることはできない。何度も失敗してきた入植を成功させた実力を彼らは備えている。

この強大なる帝国が唯一恐れていること、それはハルーシアおよび連合からの借金返済の督促である。確かに帝国は確かに周辺の魔境を物ともしない圧倒的な武力を備えているが、それを保有し、維持するための経済力が圧倒的に不足しているのだ。資源の不足と産業の未成熟。点と線による支配の弊害は、経済面に多大な負担を強いている。現状、帝国は周辺の魔境からの採取物をハルーシア、幻想詩連合、魔法師協会に売りつけることで、なんとか食いつないでいる。この経済問題は、ただでさえ乱れがちなこの大国の足並みをさらに乱しており、メディテラシア、ヴェステラシア、オステラシアの3派閥は主導権争いを繰り広げ続けている。

5.2 国号と爵位について

インガリアの帝国号は、公式に認められたものではない。アトラタンにおける『皇帝』、ひいては『帝国』号は、『皇帝聖印』を得たものにのみ許されるものであり、言うまでもなくこれは僭称である。事実、幻想詩連合の諸侯ですらインガリアのことを帝国と呼ぶ者はいないし、オステラシアと不仲なシスティナや、大工房同盟などはこれを唾棄すべき存在だと考えている。

インガリアが帝国を名乗るのは、初代皇帝メロヴェオの思想が根底にある。メロヴェオは戦乱の続くアトラタンを見限り、アルボス大陸の魔境を飲み干すことで『皇帝聖印』を生み出そうと考えていたのだ。メロヴェオ自身が魔境の開拓中に若すぎる死を迎えたことにより、この壮大な計画は失敗に終わったものの、歴代の皇帝は彼の思想と皇帝号を受け継いでいる。

侯爵相当の元首が皇帝を名乗っていることにより、インガリア貴族の爵位もアトラタンでのそれよりも高くなっている。無論、これはインガリア帝国でのみ通用する爵位であり、アトラタンではまったく通用しない(『インガリアの爵位』という言葉がアトラタンでは見栄っ張りを意味する慣用語であることから、その扱いが伺える)。以下に、アトラタンとインガリアにおける爵位の対照表を掲載する。

表1 爵位対照表

アトラタン	インガリア
皇帝	
大公	
公爵	
侯爵	皇帝
辺境伯	州総督
伯爵	公爵
子爵	辺境伯、伯爵
男爵	城伯、副伯
騎士	男爵

5.3 歴史

5.3.1 メロヴェオ・エレラの登場

インガリア帝国初代皇帝メロヴェオが始めて歴史に登場したのは大陸暦 1896 年のことである。鍛冶屋の息子メロヴェオは、暴政を敷くばかりで混沌に対して何ら処置を講じない自らの村の領主に憤慨。村を襲った投影体の混沌核から聖印を得ると、村の若者たちと共に領主を排除、君主の座に就いたと当時の史書には記されている。彼はその後わずか 3 年でハルシーア南部を統一、ハルシーア副王たる子爵の位を得た。

5.3.2 アルボスへの入植

1900 年夏、メロヴェオは自らアルボス大陸への入植を願い出た。若き英雄の存在を目障りだと感じていたハルシーア王フェリベ・ドゥーセはこれを承認、南ハルシーア諸侯による入植事業が始まった。

まずは大陸北端に橋頭堡を築くとこれをカストローヴァと命名、ハルシーアのアルヘシラスから絶え間なく人員と物資を輸送し続けた。この時入植した人間は数万とも十数万とも言われており、一気に多数の人間を失ったハルシーアはその後数十年に渡って軍事・経済両面で低迷を続けることになる。

開拓は順調に進められていったが、1907 年の夏に大きな壁に遭遇した。南方の大魔境地帯と南西の山脈、西方の湿地帯がそれである。

5.3.3 帝国建国とハルシーア戦争

アルボス開拓の功をもって、メロヴェオは魔法師協会からインガリア伯爵の称号を受けていた。インガリアは既に一国に相当する版図を得ており、誰もが開拓はここで終了するのだと考えていた。そんな中で彼は誰もが予想しえなかった行動を起こす。1908 年はじめ、インガリア伯メロヴェオは皇帝を僭称、インガリア帝国の建国を宣言したのである。協会はこの行動を激しく非難、伯爵号を剥奪すると同時に在インガリアのメイジ全員に帰還命令を出すに至る。ハルシーア王フェリベも激怒、彼に絶縁状を叩きつけると同時にインガリア領侵攻を開始した。

メロヴェオは迅速に対応した。単身渡海すると自らの従属君主である南ハルシーア諸侯を動員、北ハルシーア諸侯からなるフェリベの軍勢を迎え撃ったのである。メイジ不在のインガリア軍は苦戦するが、アルボス大陸から精鋭を召集することで戦線を立て直した。最終的に、アロンヌからの背撃を恐れたフェリベと、アルボスの開拓を望んだメロヴェオの利害が一致しこの戦争は終結を迎えた。

その内容は、インガリア側がハルシーアに所有する領土を放棄する代わりに、ハルシーアはインガリアに対し有する債権を放棄。さらにインガリアに対し無利子無担保かつ返済期限無しでの資金提供を行う、というものであった。アトラタンを見限っていたメロヴェオにとっては実質的に勝利といえるこの和約は、帝国大乱の際にカルロス 1 世が新しい条約を締結するまで続いた。

5.3.4 『栄光の遠征』、そして死

ハルシーア戦争を終わらせたメロヴェオが次に取った行動は、南西山脈地帯への進軍であった。帝国軍の精鋭によって行われたこの開拓は『栄光の遠征』と呼ばれている。山地特有の地形と、平野部に比べると段違いに強力な魔境に苦戦しながらも、1914 年には植民都市アドラーを建設するなど着実にその歩を進めていた。悲劇が起こったのはその時である。アドラー近くの魔境探索の陣頭指揮を執っていたメロヴェオが、タルタロス界の投影体と相打ちになったのだ。享年 36 歳、あまりに早すぎる死であった。

帝国建国以降のメロヴェオに対する評価は、現在でも賛否両論に分かれる。しかしながら彼が一代の英傑であったことは疑いようがなく、今なお国民に敬愛される存在である。

5.3.5 女帝時代

帝位は長男ギジェルモが継承した。彼は当時僅か 10 歳、政務を取るにはあまりにも幼かったため、皇太后クロティルデが摂政として政治の実権を掌握する。彼女が摂政として活動したのは息子が成人するまでの 7 年であったが、ギジェルモ帝は母親に頼りがちな性格をしており、さらに帝とその後継者たち (3 代皇帝ラモン、4 代皇帝ロタリオ) がいずれも早世したこともあって、その支配は彼女が崩御する 1953 年まで続いた。これを称して『女帝時代』という。

5.3.6 三大州の成立

メロヴェオの死は『栄光の遠征』の終焉でもあった。多くの君主は自らの土地に帰り、『女帝』クロティルデもそれを承認した。しかし、それを良しとしない君主たちもまた存在した。

皇弟エンリケを筆頭とする、ハルーシア時代より皇帝とともに駆け抜けた君主たちがそれである。死せる皇帝の理想を誰よりも理解していたが故に、彼の道に誰よりも殉じていたが故に、彼らには開拓を止めるという選択肢は存在しなかったのだ。かくして、植民都市アドラー周辺は魔境に呑まれることなく存続することになる。

同じ頃、東方ではシステynaから亡命したコルネーロ家の一党が帝国に庇護を願い出ていた。女帝はこれも受け入れ、彼らに東部湿地帯を与えた。

ここに、帝国直轄領の中央部、エルナンの統括する南西部、コルネーロ家が開拓する東部の三地方が成立した。現在、それぞれメディテラシア、ヴェステラシア、オステラシアと呼ばれている地方がそれである。

5.3.7 帝国大乱

20世紀半ば、帝国は安定期を迎えていた。ハルーシアからの借金は相変わらず行われていたが、それも間もなく必要ならうと言われていた。帝国史上最も輝かしいと考えられるこの時代は、『女帝』クロティルデの崩御をきっかけに終わりを迎える。

親政を始めた5代皇帝カルロス1世の強権的な政治に、ヴェステラシア、オステラシアが一斉蜂起を起こしたのである。カルロス帝は反乱の早期鎮圧に失敗、権限強化を狙うメディテラシア諸侯までもが敵味方入り乱れ争いを繰り返した。

カルロス帝は一時帝都カストローヴァを奪われハルーシアに亡命するなど苦しい状況に立たされるが、最終的にハルーシアの全面協力を得てアルボスへ再侵攻、帝国の再統一に成功した。最終的に内乱が終結したのは1965年、発生より12年後の事である。

『帝国大乱』と通称されるこの戦乱によって、アルボス大陸の開拓は30年程度後退した。ハルーシアからは助力の代償として、かつて結んだ条約はより不利な条件に(債権へ利子を付与、返済期限の設定)に更新された。さらに戦中の交渉により広範な自治権を得たメディテラシア諸侯は、帝国政府の統制を受けない存在へと変貌していたのだ。

カルロス1世は以後、59歳で崩御するまで帝国の再建に力を尽くしたという。

5.3.8 現在

アモール王国の発見以降、現在に至るまでの歴史は前出のアモール＝インガリア戦争を参照。

5.4 政治

アトラタンにおける一般的な国家と同じく、皇帝を頂点とする封建制を採用している。ただし、オステラシア、ヴェステラシアについては州政府による自治が認められている。各州総督は皇帝による任命制。メディテラシアは名目上は帝国直轄領だが、過去に乱発された特許状の影響で諸侯は半ば独立しているため、実質的には皇帝御料地のみ統治にとどまっている。

内政、外交の重要事項については帝国議会によって決定される(ことになっている)。帝国議会は一院制であり、すべての帝国貴族が議席を持つ。この議会で何かが決まることは稀であり、予算など国家運営に必要な事項は宰相を議長とする枢密院によって決定されている。

中央政府の次席は宰相、元帥、大法官の三人で、それぞれ内政、軍事、司法を分掌する。枢密院はこの三者に加え、東西両州の総督を加えた五名で運営されている。

宰相の下には内務、外務、大蔵、典礼、宮内の各省が存在し、大臣率いる官僚組織が行政を支えている。

5.5 軍事

名目上の最高司令官は皇帝であるが、通常は帝国元帥が職務を代行している。元帥は軍の作戦を指導する立場にあり、直下の元帥府が実務を担う。

東西両州は独自の兵力として州軍を持つ。これは州総督を司令官とする組織であり、その構成は州政府に完全に委任されている。ただし、指揮系統については帝国元帥の隷下であり、その作戦指導に従う義務を持つ。

5.6 地域詳細：メディテラシア (Mediterrasia)

皇帝直轄領。ハルーシア海峡 (アトラタン側呼称『アルボス海峡』、ハルーシア-インガリア間の海峡部) に面した帝都カストローヴァを中心に広がっている。初代皇帝メロヴェオがカストローヴァを建設して以来、常に帝国の中心を占めてきた。既に魔境の多くは開拓されており、北アルボスで最も安定した地方と言えるだろう。

伝統的にハルーシアとの結びつきが非常に強く、国内随一の豊かさを誇っているメディテラシアがインガリア三大派閥に甘んじている理由はただひとつ。メディテラシア諸侯の仲の悪さが原因である。皮肉なことに、豊かである事こそが争う余裕を生み出しているのだ。宮廷席次や領地の境界線、水利権等々さまざまに理由をつけて、互いを蹴落とそうと画策している。

対外的には宰相カール・ラゲンフリートを中心に親ハルーシアで纏まってはいるが、宰相自身が君主たちから嫌われている事もあり、内情はお粗末なものである。

メディテラシア人はオステラシア、ヴェステラシアを『辺境』と呼び、自らが先進地域である事を誇っている。その一方で、対岸のハルーシアに比べると遥かに遅れているのも事実であり、ハルーシアの文物を積極的に移入している (帝都に近づくとつれ、その傾向が強い)。

5.6.1 主要都市ほか

カストローヴァ (Castrova)

インガリア帝国の帝都。人口5万を数えるアルボスきっての大都市である。ハルーシア南部の港湾都市アルヘシラスからは定期船で4時間程度の距離にある。

三重の城壁に護られた堅牢な城塞都市であるが、帝都に迫る脅威も薄い現在、城壁の取り壊しも検討されている。

バダホス (Badajoz)

マナグア公領の首府。ノルテ運河の結節点に所在し、経済力ではカストローヴァを凌駕する。

アルボス最大の暗黒街を擁しており、マナグア公と密接に繋がっているのではとの噂がある。

ノルテ運河

マチェラータ河から引かれた大運河。慢性的に水不足なメディテラシアを灌漑するため、1920年代から20年あまりの歳月をかけ掘削された。

バダホスを境に北方面と西方面に分岐し、北に流れた支流はカストローヴァ市民の喉を潤している。

魔境：天の裂け目

メディテラシア南端に位置する強大な魔境。漆黒の裂け目が天地に広がっており、いまだかつてここから帰還した探検者はいないため詳細は不明。

アモール王国はこの魔境の対岸に位置しているが、互いの都合からここが緩衝地帯として機能している。

5.6.2 主要人物、組織

セサル2世 (Cesar II)

年齢：14 性別：男性

インガリア帝国10代皇帝。カルロス1世の傍系の曾孫であるが、直系皇族の断絶に伴い2010年に即位した。

皇帝としての職責を果たすべく奮闘しているが、この大国を切り盛りするには才能も、それを補う経験も圧倒的に不足している。宰相ラゲンフリートの補佐により何とか公務を遂行しているものの、その姿をして『傀儡皇帝』であると囁く者も多い。

アモールの王子ヴィクトールに対しては、同年齢であることから強い対抗意識を抱いている。

カルロス・ラゲンフリード (Carlos Ragenfried)

年齢：32 性別：男性

帝国宰相。平民出身でありながら、頭脳ひとつで出世街道を駆け上がった鬼才。純粋な文官であり、それ以外の能力は持ち合わせていない。

3年前の宰相就任以来、帝国を立て直すためにさまざまな政策を矢継ぎ早に打ち出しており、庶民からは絶大な支持を得ている。反面、貴族層の既得権益を侵すような政策を取ることも多いため、諸侯からの受けは最悪に近い。なお、叙爵の話は何度も出ているものの、固辞しているため現在でも身分としては平民である。

不安定な皇帝権力の強化とメディテラシア諸侯の弱体化を図るため、現在対アモール親征を計画中である。

ギジェルモ・ナヘラ (Guillermo Nájera)

年齢：74 性別：男性

帝国元帥兼アンボスタ辺境伯。帝国大乱期にカルロス1世を支え続けた忠臣の一人。年齢を理由に隠居し悠々自適の生活を送っていたが、長引く戦争を憂い現場に舞戻った。

かつては勇士として名を馳せたものの、高齢による肉体の衰えから滅多に前線に出ることはない。

イメルダ・デ・アルバセテ (Imelda de Albacete)

年齢：41 性別：女性

大法官兼アルバセテ女城伯。女性の身ではじめて大法官の紫服を纏った才媛。

高等法院の裁判官だった頃から公正な裁判をする事で知られており、宰相が大法官に抜擢してからは、司法制度の改革に取り組んでいる。

フィデル・ロザス (Fidel Rosas)

年齢：56 性別：男性

マナグア公爵。帝国議会議長の職にある。議会最大派閥の領袖であり、諸侯に対し大きな影響力を持つ。

「保守派」を自認しているものの、その実態は既得権益にしがみついた旧守派。派閥の構成員も彼の持つ権勢と財産に惹かれて集まって来たに過ぎず、政治的信念を持っているわけではない。

しかしながら、宰相の打ち出す政策に片っ端から反対する彼とその一党の存在が、改革の大きな妨げになっていることは明らかであり、宰相の頭を悩ませている。

マルコス・レイノーサ (Marcos Reinosa)

年齢：35 性別：男性

エブロ城伯。議会主戦派のトップである。

アモール王の持つ竜の権能を危険視しており、かの王家を滅ぼすまでは戦争を続けるべきだと主張している。

エマヌエル・デ・カセレス (Emanuel de Cáceres)

年齢：58 性別：男性

カセレス副伯。議会和平派のトップ。もと大蔵長官であり、帝国の財政状況に最も明るい一人。

20年以上続く戦争により、破綻して久しい帝国財政を再建するために、一刻も早い休戦を主張している。

レイア・ジークリンデ (Leia Sigelinde)

年齢：14 性別：女性

ブリオン女伯。年齢14にして襲爵した若きルーラーである。

若年ながら確かな手腕を持つ貴族であり、宰相ラゲンフリードにとっては数少ない諸侯層の味方でもある。しかしながら、彼の政策に共鳴して賛同しているとは言いがたく、後ろ暗い噂が絶えることはない。

野心家の策士であり、一説には帝国の覇権を握ろうとしているとも。他人の不幸を好んでいる節がある。

組織：帝国魔法院

帝国建国の際、エーラムからの帰還命令を無視したメイジたちが設立した機関。メイジの養成、および混沌の研究を目的としているところは魔法師協会と同じだが、帝国の影響下に置かれているところが決定的に異なる。創設から約 100 年と歴史が浅いため、蓄えた知識では協会には遥かに及ばないものの、実践的な部分においては見劣りするものではない。

アカデミーからは黒魔法師の集団として指名手配されているものの、構成員がアルボス大陸に留まっている限りにおいてはその存在を黙認されている。

組織：帝国議会

帝国の立法機関。カルトローヴァの王宮すぐ脇に存在する、白亜の建物がそれである。全会一致を原則とするため、この議会で物事が決まることは殆どない。

現在の議会は、諸侯の利害調整を担う機関としての役割を持っている。白い外見とは裏腹に、根回しや恫喝、懐柔、買収など、さまざまな謀略が裏で行われており、貴族たちが利権のためにしのぎを削っている。

5.7 地域詳細：オステラシア / テレスティア (Osterrasia / Terrestia)

帝国東部の湿地帯を占める州。大陸暦 1917 年に、システィナから亡命したコルネーロ家の一党が庇護を願い出たのが由来であり、住民もシスティナ系が多い。オステラシア、テレスティアはともに『東部州』を表すが、前者は帝国公用語、後者はシスティナ語によるものである。湿地ゆえに耕作に向かず、資源も低品位の泥炭程度しか産しないが、干拓により作られた耕地が経済を支えている。また低湿地にある当地方では馬匹による移動が困難であり、代替交通手段として運河網が発達している。魔境も水や海にまつわるものが多く、各都市では水軍 (あるいは海軍) を編成して対処している。

国家経済のもう一つの柱が傭兵業である。強力な水上部隊を抱えるオステラシア軍は、主に艦隊運用能力を持つダルタニアやイスメイアに雇われて、同盟のノルド艦隊のたびたび戦っている。兵の質を取ればオステラシア兵は帝国最強であり、少数精鋭での魔境探索も積極的に行われている。

ロッシェニ家に追われた元システィナ王のコルネーロ家を擁しているため、同じ連合でもシスティナとの関係は極めて険悪。一方、傭兵として艦隊を供出しているダルタニア、イスメイアとは強いつながりを持っており、オステラシアの強みとなっている。現在、ダルタニアの大工房同盟への離反とともに、幻想詩連合に属する帝国からの独立と同盟加入を求める声が日増しに強くなっており、州政府は対応に苦慮している。

5.7.1 主要都市ほか

ピストイア (Pistoia)

オステラシア 8 都市筆頭。マチェラータ河下流の三角州上にある商都である。オステラシア随一の都市としての権勢を恣にしてきたが、近年外港のアレッツォにその立場を脅かされつつある。政治面でも、ボルツァーノに総督府が移されるなど退潮の傾向が強い。

ボルツァーノ (Bolzano)

オステラシア 8 都市のひとつ。ノルテ運河の始点に位置する。その立地により、近年ピストイアから総督府が移転してきた。

アレッツォ (Arezzo)

ピストイアの外港。直接海に面しており、イスメイアやダルタニアとの交易はここを基点に行われている。長くピストイアに従属する立場であったが、大造船所の開設以降、その最大のライバルとなっている。

河川：マチェラータ河 (La Macerata)

オステラシアを貫く大河。アモール王国のスティープス川の下流域に相当する。豊かな水量をもつ一方、オステラシアを湿地化させている直接の原因であり、開拓の歴史は当河川の治水とともにあったといっても過言ではない。

5.7.2 主要人物、組織

マルグリット＝ライラ・エレクセイ (Marguerite-Lyla Elenxei)

年齢：19 性別：女性

オステラシア総督。メディテラシア諸侯のひとり、デニア公爵の一人娘。極度の平和主義者であり、内政についても素人であるが、箔付けのために総督として派遣されてきた。

本来は大過なくその任期を終えるはずであったが、アルトゥーク戦役の影響で複雑な立場に立たされている。

フランチェスコ・コルネーロ (Francesco Colnero)

年齢：41 性別：男性

オステラシア副総督兼ピストイア伯爵。システィナ王を自称する。

若い頃はみずから傭兵隊長 (コンドッティエーレ) として水軍を率い、同盟海軍と戦った歴戦の猛者。今回の騒乱においては連合派の最右翼であり、総督府に日参してはシスティナに侵攻すべきと強く主張している。

マルコ・オッタヴィアーノ (Marco Ottaviano)

年齢：35 性別：男性

エレクセイ総督の秘書官。卓越した内政家、地質学者であり、素人の総督をよく支えている。内政面における近年のオステラシアの安定は、ひとえに彼の功に負うもの大きい。

一方、権謀術数をめぐらせることは不得手であり、急変する世界情勢には対応しきれずにいる。

ルチア・バルバリーゴ (Lucia Barbarigo)

年齢：28 性別：女性

オステラシア海軍提督。「海軍」と言える規模の規模の水上兵力を運用しているのはオステラシアのみであるため、事実上帝国水上部隊のトップである。

気風のいい姉御肌の性格の女傑として有名であり、揮下の海軍も精強を誇るものの、自慢の大型艦はマチェラータ河上流では運用できないため、対アモール戦争においては不遇をかこっている。

組織：大造船所

アレツツォ市が設立した造船所。1000t 級の外洋船を建造できる、アルボス唯一の造船所である。

主に外征用の大型軍船を建造しているが、最近では商用のガレオンも建造している。

5.8 地域詳細：ヴェステラシア (Westerrasia)

帝国南東部の山岳地帯に広がる。『栄光の遠征』によって開拓された地方であり、遠征後も同地に留まった諸侯の末裔によって統治されている。急峻な地形が多くを占めるために農業は羊や山羊の放牧が中心であり、穀物はほぼ全量を輸入に頼る。鉄鉱石をはじめとした地下資源の産出が多く、鉱工業を中心とした経済を形成している。州都アドラー周辺は州内唯一の高原地帯であり、ここでは軍馬の生産が行われている。高品質の武具と軍馬、これがヴェステラシアの持つ武器なのだ。

他の二州とは異なり海への出口を持たないため、アトラタンとの関係は希薄。食料をメディテラシアに依存しているという致命的な弱点を持っており、帝国からの独立を考える州政府はアモール征服を強く推進している。

なお、州総督は初代皇帝メロヴェオの弟であるエンリケの子孫が代々務めていたが、数年前に起きたクーデターによりその座を追われている。

5.8.1 主要都市ほか

アドラー (Adler)

ヴェステラシアの州都。州唯一の人口1万を越える都市である。
中北部のヴィーデン高原に位置しており、牧畜が盛んに行われている。

地形：ジーベンビュルゲン回廊 (Siegenbürgen Korridor)

州南東部にある、東西に細長く広がる平地帯。回廊の東端はアモール王国に通じている。
名の由来は、開拓当初に7つの砦が連続して築かれたことから。地形上大軍の展開が難しく、帝国軍にとって悩みの種である。

5.8.2 主要人物、組織

クリストファー・ヴァルゼライド (Chrisotpher Valzelide)

年齢：36 性別：男性

ヴェステラシア総督。アドラー伯を兼任する。

貧民街出身の一般兵でありながら数々の功績を打ちたて、ロードに至った傑物にして英雄。將軍位にあった2011年、中途半端な日和見を続ける州政府幹部を排除すべく軍事クーデターを決行、実権を握るに至った。

メディテラシア、ひいてはハルーシアとの経済関係に依存している現状を危惧しており、開拓及び侵略をベースに自給自足を目指している。アモールの聖印とその領土は国土の安定に必須であり、その獲得を強く伺っている。

清廉潔白、質実剛健が服を着て歩いているような人物であり、不正や腐敗を一切許さない。自分にも他人にも厳しい人物。

フアン・デ・パウティスタ (Juan de Bautista)

年齢：31 性別：男性

ヴェステラシア副総督。メディテラシアの貴族、パウティスタ男爵家の当主である。

ヴァルゼライドによる軍事クーデターを追認せざるを得なかった中央政府がヴァルゼライドを掣肘するために送り込んだ監視役であり、宰相ラゲンフリードの忠実な配下。

立場上、総督をはじめとするヴェステラシア人とは対立する事も多く、次第に先鋭化する対立に頭を悩ませている。

リサ・エルドリクソン (Lisa Eldrikson)

年齢：25 性別：女性

ヴァルゼライド総督の側近。アカデミー出身のメイジであり、若くして七色の魔法を習得した天才。使命感を胸に入植を手伝おうとアルボスを訪れるも、内部抗争を続ける帝国に失望し、失意の日々を送っていた所でヴァルゼライドと出会う。

ヴァルゼライドの為人と才気に惚れ込んでおり、彼を覇者とすべく尽力している。数年前のクーデターの実行犯も彼女である。

イオリッツ・メンディザバル (Ioritz Mendizabal)

年齢：41 性別：男性

鉄剣騎士団総長。『栄光の遠征』時代から続く、ノイリンゲン副伯でもある。

総督位はエレーロ家の人間が継承するべきと考える保守的な人間であり、現政権に反発している。公人としては軍務に忠実であるのが救いといえるだろう。

『血濡れ爪の』アルフレート (Alfred "der Blutzahn")

年齢：33 性別：男性

総督の私兵隊長を務めるライカンスロープ。豪放磊落かつ乱暴な性格をしており、強い相手を見るやすぐに挑みかかる。

かつて、見境なく暴れまわっていたところをヴァルゼライドに討たれ、以後彼の弟分として付き従っている。

組織：鉄剣騎士団 (Eisenschwerter Orden)

ヴェステラシアの機動戦力の要とも言える騎兵軍団。装備ばかりが優秀で兵が伴っていないと揶揄されがちなヴァステラシア州軍にあって、飛びぬけて高い錬度を誇るヴァステラシア最強の剣である。

平地においては重装備に身を固め騎馬突撃を行うが、山岳地帯の部隊だけに軽装での遊撃戦をも得手とする。